

分散会 4

司会者 善家 勲
記録者 橋本 尚子
会場責任者 篠原 茂

島根県松江市

たまゆメンバーズくらぶ（たまめん）は、地域の文化祭への中学生の参画経験をきっかけに結成された青少年ボランティアグループで、「ふるさとを愛する若者の育成」を目的に活動に取り組んでいる。子ども会の活動や地区文化祭、運動会への参画、夏休み勉強会、星空観察会、募金活動を主催するなど、その活動内容は幅広い。また、主体的な活動ができるよう、合宿研修にも取り組んでいる。それらの活動は他地区へも広がり、協力して店を出店したり、グループワークや事例発表を行ったりするなど、お互いに交流を深め、刺激し合っている。

たまめんが平成19年の結成から脈々と受け継がれているのは、交流の場があること、社会経験ができること、地域への愛着が育つこと等、たまめんとしての活動の意義があることが大きい。また、学校、地域、家庭からもたまめんサポーターとして全面的な協力体制がなされており、それぞれの立場でたまめんを支えていることも、一つのよさである。今後は、参加者と協力者の固定化、年代の多様化等の課題に対しての手立てを探っていきたい。



池田 俊貴 氏

長野県松本市

松本市では、「若者が生きるまちづくり」を目指して活動を行ってきた。1年目は、若者の実態把握と交流から始めた。参加団体も少ないところからのスタートだったが、若者が抱えている悩みや、縦のつながりがないこと、地域ごとに取組に差があること等、様々な課題が浮かび上がってきた。2年目には、若者に出番と居場所をつくる活動として、カフェや地区の休耕田を利用し若者と地域が交流する機会を設けた。そして3年目には、複合施設を利用して「おしゃべりカフェ」を開催した。キーマンとなるスタッフを養成し、2回の実施だったが、参加者の親睦を図ることができた。

これらの活動は「楽しい。面白い。」というところからスタートしている。しかし、その枠だけにとどまらず、若者の声に耳を傾けられるよう、カフェは声を拾う場として、今後もアンテナを高くしていきたいと考えている。そして今あるものを再評価し、積み重ねてきた経験を大切にしていきたい。



中山 勇太 氏

愛媛県双海町

地域おこし協力隊として千葉から移住し、3年の任期で活動を行っている。一つ目は、「まちづくり学校 双海人（ふたみんちゅ）」の活動である。地域の名産を生かした特産品開発を行い、JRの観光列車「伊予灘ものがたり」お出迎え事業においては、10分の離合時間に特産品の販売を行うことができた。二つ目は「棚田再生プロジェクト」。これは、県外からも観光者が訪れるほどの景色を残せないかと始まったプロジェクトである。休耕田を人づてで紹介していただき、初年度はかぼちゃ畑づくりからスタートした。最初は一人だったが、SNSやパンフレットの活用、愛媛大学の方との連携を通して活動を広げていった。当初は、都会の人に関わってほしいという思いがあったが、地元の人が機械やトラクターの手配、電気策の設置をしてくださる等、地域が温かく関わってくれた。地区の方にも参加を呼び掛けて収穫祭をしたときに「集落があなたのおかげで活性化した」と



川口沙也加 氏

という言葉がいただくことができた。これからも、様々な活動を通じて人と人とのつながりを深め、里山のよさを伝えていきたい。

発表の活動内容について

島根県松江市のたまめんが行っている夏休みの勉強会は、塾や学校のようなスタイルをとらず、あくまで子どもたちの勉強の様子を見守るという形をとっているためどの地区でも青少年の地域参画として取り掛かりやすい。しかし、心配はあるので、教員を退職した地域の方にボランティアとして関わってもらっている。毎年多い日で1日50人程度の小中学生の参加がある。



愛媛県双海町の「棚田再生プロジェクト」では、収穫祭はもちよりの会にした。地元の人だけではなく、外国の方などいろいろな方に参加していただいたことがうれしかった。また、SNSを利用することにより、県外の方も応援してくれるようになった。公民館活動自体が少ないので、今後も収穫祭を続けていきたい。

松山市堀江でも収穫祭を行っている。人数が減ってきて、何かしら変化を付けていく必要がある。収穫から関われる農作物はないか試行錯誤していきたい。

松本市は、駅につくとバイオリンの音が鳴っている、音楽の町である。3つの市民芸術館ができ、小澤征爾フェスティバル等も行われている。公民館の事業として音楽を取り入れたイベントはあまりないが、市街地の地区でやっている、街角コンサート（街コン）がある。

事業の運営に関わるキーパーソンについて

玉湯地区では、退職した方や保護者世代などにサポーターとして関わっていただきながら事業を行っている。また、学校の先生、部活動の顧問の先生、PTAの役員さんに声を掛けて呼びかけてもらうこともある。Uターン、Iターンで来られた方もいろんなノウハウを持たれていることが多い。いろいろな方の力を生かし、活力をもらいながら事業を運営していきたい。そして、「町で育った人」が親になり、子どもへと伝えるという循環ができるようにしたい。

松本市では、勤労育成フォームに登録している方が300人程度いらっしゃるの、そこのつながりから事業を進めている。また、市内に2つの大学があり、大学とも連携することができた。また、住民の意識を取り入れるためにワークショップやヒアリングを取り入れたが、ワークショップは大学の先生の協力を仰いだり、ヒアリングも日ごろ若者と接しているであろう公民館等のつてを頼ったり、大学のサークルや高校のボランティアサークル等をあたりたりした。

モデル指定を受けた影響や今後の活動について

玉湯地区では県から助成金を受け、たまめんの宿泊研修や模擬店の出店資金に利用することができた。また、発表を通して、玉湯の認知度が高まり、広報活動としても非常に役立ったと感じている。今では模擬店の収益金を活動資金として助成金に頼らない運営が可能になった。指定が終わった後、活動をいかに継続していくかがどの地区も抱える一般的な課題ではないだろうか。

松本市では、単独予算でこれからも活動を続けていく。ただ、この方向性でいいのか考える必要があるが、柔軟に対応していきたい。また、高齢化が進んでいるという喫緊の課題があり、地域課題と市制課題がだいぶ近づいてきている。中山間地のバス運営について模索するなど、限界集落が生き残る道をどこに求めるか、住民としての学びと実践を生かしながら取り組んでいきたい。

中高生の地域活動への参加、卒業後の活動について

玉湯地区では、中学校卒業の段階で、ボランティア参加を呼び掛けたり、入会のパーティーを行ったりして啓発活動を行っている。友達が友達を誘って他地域の子も活動に参加することもある。今後も小学校から地域の活動に参加し、玉湯の一員であるという認識を高める必要がある。

小学校のときにどれだけふるさと教育を行えるかが重要である。体験活動に参加することで、中高生になったときに主体的に関わることの人材を育てていくことや、高校を出てからの受け皿づくりも必要である。

愛媛県立新居浜南高校では、ユネスコ部の活動で、地域の情報を発信する活動をしている。先輩から活動の話聞いて新居浜のおもしろさに気付くことができた。今は、別子銅山について調べており、それらの活動報告をする中で、人前で話すこともどんどん慣れてくるなど、自分自身の成長にもつながっていると感じている。まずは、中学生高校生がいろいろな活動に参加することが大事だと感じている。

公民館の運営の在り方について

玉湯公民館は旧玉湯町時代には教育委員会の直営館であり、町職員が中心に運営していたため松江市との合併による公設自主運営方式への移行は地域住民の不安も大きかったが、地域の方に運営に関わっていただくよう、何年もかけて説明や働きかけを行ってきた。玉湯の方は「自分たちの地域は自分たちで作る」という意識が高い方が多く、その面でも公設自主運営移行の形をとりやすかったと感じている。ただ公民館の活動量が多いが故に、職員の負担も多く、手薄な部分も大きい。一例として島根県大田市の公民館は館長と嘱託職員のみだが、市の社会教育主事と連携して活動に取り組んでいる。職員体制が手薄な公民館は市町村派遣社会教育主事と連携するのは有効な手段である。また松江市の公民館では、8割の職員が社会教育主事の有資格者であり、専門的な知識を生かして各公民館が事業運営を行っている。また、社会教育主事は任用資格のため資格を持っていても任命権者の任命がないと資格を名乗ることはできないが、松江市では各公民館職員が「公民館社会教育主事」として登用されるよう働きかけを行っている。

愛媛県は館長と職員がいる程度で、他の市町村、公民館同士のパイプがなかなかできていない。伊予市や新居浜市では各公民館に社会教育主事を置くようになっているが、宇和島市では1名しかおらず、市町村間でも格差がある。また愛媛県伊予市（旧双海町）では、自治会と公民館が双壁の形になっている。それぞれが個々で運営しているので、地域によっても活動に大きな温度差がある。

いろいろな経験や知識がないと運営は難しいため、様々な地域に社会教育主事がいて、協力し合えるような仕組みづくりが必要である。

地域福祉について

松江市では、地区社会福祉協議会の事務局が各公民館にある。そこから民生委員などと協力して、高齢者の見守り、障がい者の支援、福祉などを行っている。

これからは、社会教育だけでなく、地域福祉も進めていく必要がある。松江市をよいモデルとして、他機関、地域の方々とも連携を図りながら取り組んでいきたい。

地域おこし協力隊の活動について

愛媛県宇和島市の協力隊の方は趣味と実益を兼ねている。限界集落をどのようにアピールするか大事だが、アピールする機会を与えてもらうには、それなりの活動実績も必要である。しかし、

ビジネスとして成り立つには難しい部分もある。地域の人間としては、生活として自立できるように3年間を地域がどうサポートできるのかが課題だと感じる。

協力隊になってみて感じるが、協力隊の方々は自分で何かをしたいという思いがある。起業しないかといわれるが、自分の起業のための3年間ではない。温かい目で応援してくれることが一番ありがたい。

どの協力隊も地域と協力隊とのかかわりが深く、人と人をつなげてくれている。その中で地域が抱えるいろいろな課題も引っ張り出してくれる。そしてその課題を行政に結び付けることもできる。公民館自体の機能が低下しているように感じるが、外部の人の視点を公民館も取り入れ、地域と公民館とが一体となって取り組んでいきたい。また多様性を大事に、地域のための公民館であることを大事にしていきたい。

